

パンデミック下における広島大学のオペラの取り組み

—オペラの間人形成的意義への可能性に着目して—

大野内 愛

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

樋口 史都

(広島大学大学院教育学研究科博士課程前期)

枝川 一也

(広島大学大学院人間社会科学研究科)

The Opera Project at Hiroshima University amid the COVID-19 Pandemic: Focusing on Educational Significance of Opera

Ai ONOUCHI

Fumito HIGUCHI

Kazuya EDAGAWA

Abstract

This paper reports an opera concert which was held at Hiroshima University in November 2020 as well as the process surrounding this concert. Through an analysis, it aims to examine the educational significance of the Opera Project held at Hiroshima University. In 2020, the COVID-19 pandemic had a tremendous influence on our lives. Almost all music concerts were canceled or postponed. Opera concerts faced especially greater challenges than other types of concerts, as singers cannot wear a mask when they sing and keeping a distance between performers is extremely difficult due to the nature of the performance. At first, an opera concert was to be held in April 2020 at Hiroshima University as part of a class entitled “Opera Ensemble”. Needless to say, it was also delayed to November 2020. In addition, the “Opera Ensemble” class could not be normally taught. Therefore, class activities were transformed. Students took and edited videos themselves on behalf of regular Ensemble in the first semester. Consequently, in this November concert, only solo arias were played, and the produced videos were displayed. Additionally, various measures were prepared to counter the spread of the virus. These measures aimed, for instance, to decrease the capacity of the hall, to provide ventilation between the pieces, to collect the addresses of spectators etc. Although the pandemic had a profound influence on us all, positive aspects which we would have never witnessed without the pandemic exist. In conclusion, three positive aspects were identified: (1) the possibility of breaking fixed ideas, (2) cultivating students’ information and communication technology (ICT) literacy, planning ability, and cooperation spirit, and (3) considering what essential music is.

はじめに

本稿は広島大学教育学部音楽文化系コースの専門科目「オペラ実習」の授業の一環として2020年4月14日に開催予定であったオペラハイライト「セビリアの理髪師・フィガロの結婚」の延期公演として2020

年 11 月 7 日に広島大学教育学部 F101（演奏室）で開催された同名演奏会の上演までの過程を報告し、パンデミック下の広島大学におけるオペラの取り組みによる人間形成的意義への可能性について明らかにするものである。

2020 年に世界中で猛威を振るった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）は、教育機関においても甚大な影響を与えた。小・中・高等学校は、ほとんどの地域で休校を余儀なくされた。大学は全国的に見てもより規制が厳しく、小・中・高等学校での通常授業が再開された後も入構が制限され、授業の多くはオンラインによる非対面型に切り替えられた¹⁾。広島大学では、実技科目についてもオンライン授業が実施されていたが、感染者数の減少と大学の行動指針の緩和に伴って、感染防止対策を徹底した上で 1 対 1 の対面授業が順次再開されていった。しかしながら、楽器よりも飛沫拡散のリスクが高く、複数人のアンサンブルを基本として、演技による他者との「濃厚接触」が必要とされるオペラの性質上、「オペラ実習」の授業を対面で再開させることは、困難であった。

そうした状況に鑑み、2020 年度前期の「オペラ実習」の授業は、4 月に公演予定であったオペラハイライト「セビリアの理髪師・フィガロの結婚」の演目のリモートによる動画制作に切り替えて実施された。当初はオンライン上で動画とナレーションを交えたデジタル・コンテンツの制作を予定していたが、夏にかけて感染拡大がやや収束していき、各種の演奏会も再開されていったこと、感染予防対策を徹底し、リスクを最小限に抑えながら公演を実施する準備が整えられたことから、2020 年 11 月 7 日に制作した動画と独唱の生演奏を交えた形で演奏会を実施することとなった²⁾。

パンデミックは我々の生活に大きな傷跡をもたらしたことは事実である。しかしながら、パンデミック下においてオペラの授業と公演を実施したことにより、気づくことのできた新たな可能性もあるように思われる。本稿ではそのような肯定的側面に着目し、パンデミック下でのオペラの授業や公演によって見出すことのできた広島大学におけるオペラの取り組みの人間形成的な意義について考察する。

1. パンデミック下のオペラ公演の状況

2020 年に全世界を襲った新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行拡大は各方面に多大な影響を与えた。2020 年 3 月 11 日に WHO（世界保健機関）によってパンデミックが宣言され、日本においても急速に感染が拡大していった。外出の自粛が求められるようになり、2 月の末からは国内の演奏会は軒並み中止あるいは延期されていった。その後も感染は収束するところを知らず、4 月 7 日に東京、神奈川、埼玉、千葉、大阪、兵庫、福岡の 7 都道府県に、16 日には全都道府県を対象に緊急事態宣言が発出された。6 月以降は感染拡大が緩やかになり、感染予防対策を施した上で少しずつ演奏会が実施されるようになっていった。

藤原歌劇団公演《カルメン》

そのような中で最も早い時期に行われたオペラ公演として注目されたのが、8 月 15 日から 17 日にかけて東京のテアトロ・ジーリオ・ショウワで開催された藤原歌劇団公演《カルメン》である。もともと 2020 年 4 月に公演予定であったものの延期公演であり、感染予防対策を講じた上で上演された。音楽稽古では、練習会場へ入場前の検温、ソーシャルディスタンスを保つための間隔をあげた座席配置、常時換気を行いながらの稽古、フェイスシールドの全員着用といった対策が講じられた³⁾。本番の公演でも舞台上の歌手、ダンサーはフェイスシールドを着用し、岩田達宗による特別演出によって安全な舞台環境での上演が試みられた（梅津 2020）。この公演はフェイスシールドの着用や演出の変更などは行われたが、基本的には当初予定したのと同じ形で上演された。

ひろしまオペラルネッサンス「モーツァルト・ガラ・コンサート」

一方、2020 年 9 月 27 日に広島の JMS アステールプラザ大ホールで開催されたひろしまオペラルネッサンスによる「モーツァルト・ガラ・コンサート」は、藤原歌劇団公演とは異なる方法で開催された。この公演はもともとオペラ《ドン・ジョヴァンニ》の公演が予定されていたが、内容を変更して演奏会形式のガラ・コンサートとして開催された。この公演でも歌手のフェイスシールドの着用、客席を、間隔を取っ

て配置するなどの対策が取られた。音楽稽古も、なるべく接触を避けるような稽古時間の設定や小道具使用の管理が徹底されるなどの対策がとられた⁴⁾。

ひろしまオペラルネッサンスの公演が藤原歌劇団公演と決定的に異なっていたのは、公演内容と形式の変更である。「モーツァルト・ガラ・コンサート」では演目が大幅に変更され、通常のオペラ公演ではなく、演奏会形式で行われた。奇しくも両公演とも岩田達宗による演出であったが、開催時期、会場の条件などそれぞれの状況に合わせた演出が行われ、ひろしまオペラルネッサンスの場合、より感染リスクを減らすことが念頭に置かれていたと考えられるだろう。

2. 広島大学における「オペラ実習」の理念

広島大学におけるオペラの教育は、1992年に「重唱」という科目名で開講され、1995年から現在の「オペラ実習」という科目名となった。「オペラ実習」の授業の主な活動は、年に2回の学内オペラ公演（ハイライト公演）とそれに向けた準備である。公演は基本的には学内の音楽棟内にある大きな教室で実施している。学内公演のほか、依頼があれば他大学や小・中学校でのアウトリーチ活動も行っている。

本科目は2～4年生の選択科目として設定されており、履修者の中で全体のまとめ役としてのインスペクターを3年生から選出し、学生が主体となって運営にあたる。さらに経験のある大学院生がTAとして指導的立場で参加している。

オペラによる教育を行う目的は大きく分けて2点ある。1点目は、音楽の専門的能力の育成である。オペラの名シーンを実際に演じたり、伴奏の専門家を外部指導員として招き、レクチャーを受けて実践に活かしたりしている。2点目は、企画力・実践力の育成である。演奏だけでなく、舞台装置や衣装、広報活動など、オペラの運営に関わることをすべて企画・実践する。

「オペラ実習」においては、大きく分けて、演奏者、スタッフの2つの仕事がある。スタッフの仕事内容は、舞台照明、衣装、大道具、小道具、字幕、広報、プログラムやチラシ作成、会計など様々なものがある。一般的なオペラでは、各分野の専門家がそれぞれの役割を担うが、「オペラ実習」においては、1人の学生が2つ以上の役割を兼任することがほとんどであり、特にスタッフの業務については全員が関わる。

「オペラ実習」では演奏者もスタッフも全員が、その公演内容の音楽や物語を理解し、そこから各分野の業務にあたる。つまり、歌い手は演技や歌唱表現の工夫、伴奏者は場面ごとの伴奏法や演奏表現の工夫、スタッフは歌い手が歌いやすく、演技しやすい衣装や道具、効果的な照明や、演出の意図にあった字幕の作成などを行う。そして、「オペラ実習」では1人の学生が複数の役割を担っているため、自分の主な役割についての工夫のみならず、お互いの仕事へのアドバイスや意見交換など、各分野が有機的に関わり合い、全員で制作していく。

こうしたオペラによる教育の理念として「プリモ・プリマ（つまり主役）をつくらない」ということを掲げている。一般的なオペラ公演では、歌手や指揮者、演出家が主体となるが、本学の「オペラ実習」においては、裏方までが全員同じ立場であり、全員が主体となって活動する。これは、広島大学のオペラ公演の本番において、演奏者、及びスタッフ全員が平等にカーテンコールを受けるといった伝統にも現れている。

「オペラ実習」の履修者は、全員が決して高度な演奏技術を有しているわけではない。しかしそれぞれの学生は、オペラに関わる様々な役割の中に自分の得意なことや楽しんでできることを見つけ、役割を果たすことで他者に認められていく。また、オペラを制作する中で、他者の苦手なものや不得意なことにも気づき、それを意識的に、もしくは無意識的に補い合っている。オペラを制作するという1つの同じ目的に向かって行動することで、帰属意識は強くなる。これらの自己有用感や互助精神、帰属意識に関しては、音楽でなくてもできることであるが、教員養成においてオペラによる教育を推進している理由は、このほかに音楽でしか果たし得ないことがあるからである。それは、音楽を丁寧に作っていけば、最終的にオペラ公演において、音楽の美しさ、音楽の素晴らしさに感動し、その感動によって1つになる力を音楽が与えてくれるということである。これは他の演劇やスポーツでは味わうことのできないことであり、オペラによる教育は、音楽だからこそできる人間教育であると考えている。これを全員で味わうために、全員が主体となって活動するということが、つまり「プリモ・プリマを作らない」という理念を掲げて活動を続け

ている。だからこそ取り組みの中で、履修者の1人でもこの活動に対して「嫌な思いをしないこと」を大切にしている。つまり「オペラ実習」は人を排除してまで高いレベルのオペラ公演を目指しているわけではない。「たった1人でも嫌な思いをするのであれば、その公演は失敗だ」と学生に伝えたこともある。1人残らず、全ての履修者が「参加してよかった」と思えるものを目指すことを目指している。

3. パンデミック下における「オペラ実習」の実践報告

2020年11月7日に広島大学教育学部F101（演奏室）で開催されたオペラハイライト「セビリアの理髪師・フィガロの結婚」は、2020年4月14日に開催予定だった同名演奏会の延期公演である。予定していた公演は4月以降、無期限の延期となった。以下に2020年11月7日の公演までの過程を時系列に沿って記述する。

6月

6月16日の初回授業で、Microsoft Teams のオンライン会議システムを利用して、教員からリモートでの動画制作についての説明がされた。リモートでの動画制作は、接触する人数を限りなく少なくするために採用された方法であった。つまり、重唱の場合、ピアノと各声部をそれぞれ個別に撮影し、最終的にそれらを重ねて、1つの動画に編集する、いわゆる多重録音で、字幕の挿入も含め、編集作業もすべて学生自ら行う想定で進められた。ただし、過去にこのような形での動画制作の経験がなかったため、各方面でソフト/ハードの両面から試行錯誤しながら進められた。今回の「オペラ実習」では、むしろ、そのような試行錯誤の過程を学習体験として位置付けていた。

取り組む曲については、多重録音であることを考慮し、当初予定したものからいくつか変更を加えた。レチタティーヴォについては困難であると判断し、取り扱わなかった。

6月23日には、演奏以外での係の役割分担が行われた。今回は、通常設けている係のほかに、「動画編集係」、「Sway 編集係」⁵⁾を新たに設け、照明係は動画の撮影係も兼任した。学生の中には、広島県外の実家へ帰省し、大学キャンパスに来ることが難しい人もいたため、遠隔地からでも参加できるような係分担になるよう考慮した。

表1 2020年度前期「オペラ実習」における学生の係分担⁶⁾

係	人数	うち広島県外からの参加者
大道具・小道具係	7	
照明・撮影係	3	
字幕係	5	1
衣装係	5	
動画編集係	2 (4)	
Sway 編集係	3	3
インスペクター	2	
ティーチング・アシスタント	2	
その他		1
計	30	5

7月

動画制作の手順は、まずピアノの動画を撮影し、その音声を聞きながら各声部の撮影をするというものである。その際、通常と同じようにピアノを演奏すると、速度やブレスのための間合いのズレといった問題が生じることが予想されたため、撮影の前に教員によるピアノ演奏のレッスンが行われた。それを踏まえて、各演目のピアノの演奏を撮影し、随時歌唱の撮影に移っていった。動画の撮影は学生個人が所有す

る iPhone を使用した。それによってカメラなどの器具の共有を避けることができ、撮影、録画したデータの共有などをより簡単に行うことができた。また、撮影した動画は Teams にアップロードして各係間で共有した。

動画の撮影は、音声と映像を同時に撮影する形で行った。映像と音声を別々に撮影することによって、より音質の良い動画を制作することができるのではないかと議論もあったが、プロモーションビデオではなく、あくまでオペラの演奏であるということを重視し、音声と映像を同時に撮影する方法を選択した。また、ここで言う動画とは、ただカメラに向かって演奏しただけではなく、演技をしながらの歌唱であった。通常通りの演技はできないが、逆に動画の特性を生かした動きを考え、事前に絵コンテを作成するなどして撮影に臨む演目もあった。

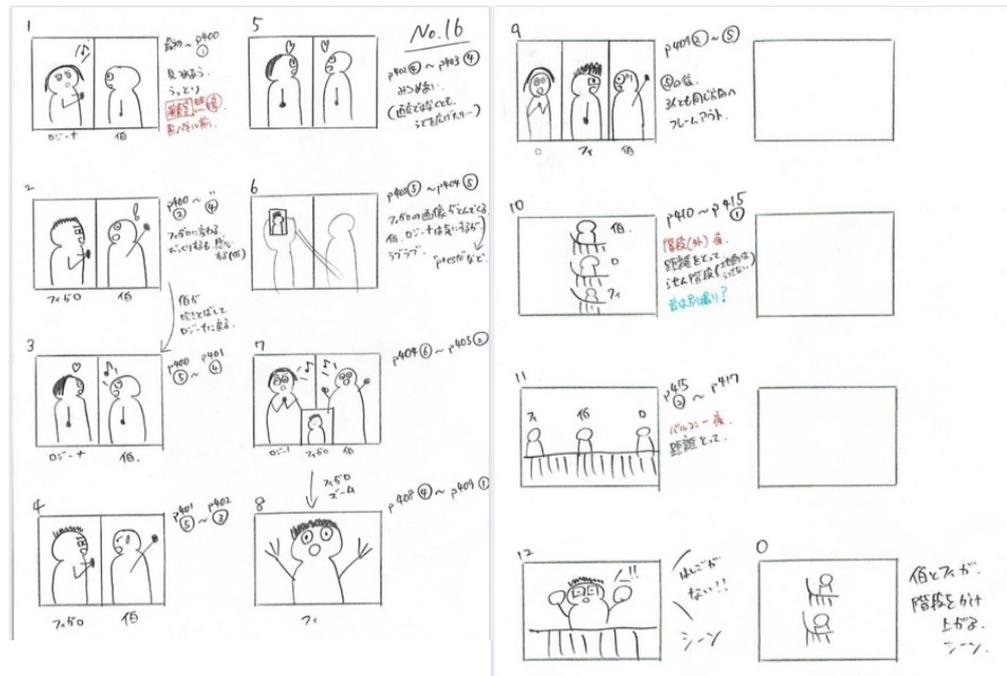


図 1 絵コンテの一部

8月

ピアノの動画の撮影が完成次第、順次歌唱の撮影を行った。撮影の場所は、大学内にある演奏室（200名収容可能な大教室）での撮影を基本とし、各自で日程を調整して歌手と撮影者のみ参集して撮影を行った。ただし、県外からの参加者は、演奏室に来ることが難しいため、自宅や近所の河川敷などで撮影を行い、Teams にアップロードした。静岡県、兵庫県、島根県、福岡県から参加した学生がおり、衣装を着ることができない、背景が統一できないといった制約が生じたが、なるべくコンタクトを取り、遠隔地からの参加を活かすような演出や衣装、背景などを試みた。また、広島県に在住しており、演奏室での撮影が可能な演目も、積極的に屋外での撮影の可能性を模索した。《セビリアの理髪師》でのほしごを使って、逃げようとする場面では、実際に大学の屋外に設置されている外階段を利用し、バルコニーも施設の窓の外にあるスペースを利用して撮影を行った。物語の設定は、夜であるため、撮影も日が暗くなった時間帯に行った。そのまま撮影すると暗くて歌手の顔が映らないため、照明器具を外へ持ち出して撮影した。撮影に関わる創意工夫や実際の撮影作業はすべて学生中心に行われた。



写真1 演奏室での撮影の様子



写真2 屋外での撮影の様子

8月になり、感染者数が減少し、各方面で感染防止対策が提唱され、感染のリスクを最大限に減らした上でイベントが開催されるようになった。そのことを踏まえて、「オペラ実習」でも感染予防対策を講じた上で、動画と生演奏を交えた公演を行う可能性が浮上した。その際に検討した感染予防対策は以下の通りである。

- ・生演奏する曲目は、最少人数でできるアンサンブルである独唱のみとする。
- ・定員を4分の1の49名に減らす。
- ・客席の間隔を空けて配置する。
- ・感染者が発生した時のために来客者の連絡先を控える。
- ・公演中もマスク着用をお願い。
- ・入口での検温、手指の消毒の徹底。
- ・休憩のほかに全4回のドアを開放した換気。

また、広島県では「全国的又は大規模イベントの事前相談に係る実施要領」を令和2年7月16日に制定、同9月23日に改正しており、本公演は「全国的な人の移動を伴うイベント」として県に事前相談を行い、適切なアドバイスを受けた。その上で以上のような感染予防対策を講じ、11月7日に第14回広島大学ホームカミングデー公演としてオペラハイライト「セビリアの理髪師・フィガロの結婚」が開催されることとなり、これ以降、動画の制作の継続と公演に向けた準備をしていった。

9月

8月で一通り動画の撮影は終了した。9月は大学の休業期間中であるが、各係で必要な作業を行った。動画の撮影終了後、動画編集の作業が始められた。編集には個人が所有する編集ソフトや、Adobeが提供する動画編集ソフトを利用した。ほとんどの学生にとって動画編集は初めての作業であり、試行錯誤を繰り返しながらの作業となった。動画が完成次第、字幕係へと受け渡され、字幕の入力作業に移った。

10月

10月に入ってから、生演奏をする演目の練習と公演に向けた準備等を行った。まず、教員によるレッスンが行われ、公演に向けて再編した系の活動も平行して行われた⁷⁾。感染症対策としては、客席に番号をふり、その番号を用紙に記入して提出してもらうことで、だれがどこに座ったのか把握できるようにするなどの工夫が施された。動画の投影に関しては、動画の容量が大きく、途中で動画が再生できなくなってしまうというトラブルが発生したが、容量の大きいパソコンを購入したり、最終的なデータの受け渡しをインターネット上ではなく、USBを通して直接行ったりすることで解決した。

10月時点での公演計画に対して、より多くの人に観てもらえるように、広い会場での開催を行ってはどうかという声があがった。しかし、公演までの時間や舞台装置などの都合上困難であると判断し、その代わりに公演の模様をYou TubeチャンネルにてLive配信を行うことになった。Live配信では、映像と生演奏の切り替えなど、複雑な作業が必要であったが、広島大学情報メディア教育研究センターと技術センタ

一の協力により実現可能となった。

11 月

公演は11月7日土曜日 14:00 開演（13:30 開場），公演時間は約2時間で，間に15分間の休憩が取られた。例年は超満員になるオペラ公演であるが，今回は，チラシでの広報活動を行わなかったこともあり，間隔を取って配置した客席の定員49名に対し，約7割となる36名の来場者数であった。しかし，YouTubeチャンネルでのLive配信では，約80名の視聴があった。

表2 オペラハイライト「セビリアの理髪師・フィガロの結婚」
(2020年11月7日)で演奏した曲目

曲 目	演奏形態
セビリアの理髪師	
第1幕より	
Piano, Pianissimo	映像
La ran la lera	生演奏
Se il mio nome saper voi bramate	生演奏
Una voce poco fa	生演奏
第2幕より	
Contro un cor che accende	映像
Don Basillio !	映像
Ah ! Qual colpo inspettato !	映像
Finale	映像
フィガロの結婚	
Overture	生演奏
第1幕より	
Cinque...dieci	映像
Via resti servita	映像
第2幕より	
Voi che Sapete	生演奏
Sussana or via sortite	映像
Aprite presto aprite	映像
第3幕より	
Riconosci inquest amplesso	映像
Dove sono i bei momenti	生演奏
第4幕より	
Deh vieni non tradar	生演奏
Finale	映像



写真3 間隔を取って配置した客席



写真4 公演で上映した映像



写真5 生演奏の様子



写真6 生演奏の様子

4. ハイブリッドによるオペラ公演の人間形成的意義への可能性

パンデミック下において多くの演奏会が中止を余儀なくされる様子を見て、非常時における音楽の優先順位の低さを実感することとなった。さらに我々も「音楽は生演奏であるべき」という自分たちで作り出した固定観念に囚われて、身動きの取れない状況を体験した。しかし、こうしたパンデミック下において「オペラ実習」でチャレンジした取り組みにより、見えてきた成果3点をまずはここに挙げる。

1つ目は、「音楽は生演奏であるべき」という固定観念を崩すことができたことである。もともとは動画作成による人と人とのつながりに対して半信半疑でスタートした取り組みであったが、オンラインを中心にした演奏であっても、音楽本来の姿である、人とのコミュニケーションが実現できるということを経験できた。今回の動画作成においては、まずピアノの動画を撮影し、それに合わせて各声部の撮影をした。歌唱の動画を撮影する前には、事前にその場面の演者により絵コンテが作成され、それをもとに相手の動きや歌詞の内容を想像しながら演技をした。実際にその場に相手がいなくとも、想像しながら演技をすることにより、相手を思いやり、相手を感じる事ができた。そしてその動画が組み合わさって編集されたとき、生演奏が絶対であるという固定観念が崩れたことを感じた。

2つ目は、学生のICTリテラシー、企画力および協働性につなげることができたことである。まずパンデミック下において、できることは対面で、できないことは非対面で、というオペラ公演の方法論を確立することができた。4月より本コースでは、大学の規定に従いながら、独自の音楽棟使用規定を作成し、フェーズが変わる度に改訂した。オペラ実習の初回授業が実施された2タームの音楽棟使用規定において

は、2名以上のアンサンブルは禁止しており、伴奏をつけての練習はできない状態であった。そして夏季休業からの使用規定では、演奏会やコンクールなどがある場合のみ、限られた教室において2名での練習を可能とした。したがって、オペラ実習の授業においてもこれに則り、独唱部分のみピアノ伴奏と合わせた演奏は可能だが、2名以上が歌唱するアンサンブルの演奏は不可能であったわけである。そこで、11月の公演に向けては、「できること」つまりピアノと独唱者2名での歌唱は対面で演奏し、「できないこと」つまり2名以上が歌唱するアンサンブル演奏は非対面での動画上映という、ハイブリッドタイプの上演が実現したのである。前述したように、藤原歌劇団公演は、ある程度のリスクを背負いつつ、予定していた内容でオペラ全幕上演を行ったのに対し、ひろしまオペラルネッサンスの公演では、ガラ・コンサートという形で内容を大幅に変更したが、その分リスクを減らすことに成功した。このように考えると、今回の本学での公演は、ハイライトとは言え、オペラをハイブリッドで上演したということから、その方法は、藤原歌劇団とひろしまオペラルネッサンスの中間的な立ち位置であったと言える。

このような制限がある中での取り組みは、ICT機器を使っていくというリテラシー、企画力、他者との協働性につなげることができた。パンデミック下において、日本では多くの動画撮影・編集ソフトが誕生していた。オペラ実習では、オンライン会議でTeamsを使用すること以外、動画の撮影や編集に使用するツールは指定していなかったため、ソフトについても学生たち自身で探しながら動画を作成していった。また、公演においてはプロジェクターを使用することにより、演出の幅を広げることができた(写真5・6参照)。これまでICT機器に興味のなかった学生も必要に迫られ試行錯誤したが、オペラ実習ではその過程すらも学習体験として位置付けたのである。その試行錯誤の過程においては、どのように撮影すれば良い動画となるのかなど、演目ごとに綿密に企画し、他の演目の学生との情報交換を行うなど、主体的に企画、協働している姿が見られた。

3つ目は、制限がある中での取り組みだからこそ、音楽とは何かという本質について考える機会を得たことである。「オペラ実習」では昨年度までも、ある制限の中で工夫していくことが常に求められていた。例えば、限られた予算の中で、そして自分たちのもつ演奏技術や、大学の設備の中での工夫について常に考えて公演を行ってきた。しかしそれらの工夫も、濃厚接触ができてこそのものであった。そもそもオペラは「密接」な人間関係のもと繰り広げられるドラマを表現するものであり、濃厚接触なくしては実現できないものと捉えていたのである。今回、パンデミック下においてその濃厚接触が阻まれ、オペラを上演することは不可能なのではないかと思われたが、その中で今回のように公演を実現できたのも、これまでのオペラ実習における多彩な工夫の積み重ねがあったからであると言える。演奏のクオリティのみを求めれば、他のプロの団体のように、フェイスシールドをつけての演奏や、公演内容を変更しての上演といった、いわば消極的な方法を取らざるを得ないが、教育的効果を重視する「オペラ実習」の取り組みだからこそ、前述した、いわば積極的な新しい方法論の確立ができた。「オペラ実習」は前述の通り、理念として「プリモ・プリマをつくらない」を掲げ、公演をすること自体を目的とするのではなく、全員が主体的に考え、活動することを大切にしている。今回も、音楽が与えてくれるであろう感動や、その感動で1つになる力を信じて取り組み、結果、観客や同時配信の視聴者から好評を得ることとなった。音楽とは何かということを改めて考えることができた。

これらの成果は、1992年からの多くの先輩方の試行錯誤の積み重ねがあったからこそ得られたものであり、一朝一夕には実現できなかった。さらに演奏のクオリティだけを求めず、教育的意義を重視する教育機関だからこそできたものである。これまでの「オペラ実習」の取り組みは、枝川・大野内(2013)により教員養成における教育的効果が示されていたが、奇しくもこのパンデミック下のマイナス条件において、オペラの取り組みのさらなる人間形成的意義への可能性が見えてきた。それは言葉で表せば、世の中の変化に適応して創造する力であり、パンデミックという危機的状況下においても心の豊かさを求め、他者と建設的に協働できる人間力と言えるだろう。

註

- 1) 主に Microsoft Teams, Zoom といったオンライン会議システムなどを利用して行われた。すぐにオンライン授業に対応できたわけではなく、環境整備のために広島大学では 1 週間ほど授業期間をずらして開始された。
- 2) 本公演は第 14 回広島大学ホームカミングデーの一環として実施された。また 2020 年国立大学フェスタ参加作品である。
- 3) 藤原歌劇団・日本オペラ協会ホームページ、「カルメン 2020 舞台裏レポート」より。
- 4) 本稿共同執筆者である大野内愛がソプラノで出演した。
- 5) 当初動画の制作が完了した後は、Microsoft が提供するプレゼンテーションソフトウェア「Sway」を利用し、レチタティーヴォの内容や曲間のつながりを文章で補ったものをインターネット上で一般公開する予定であった。しかし、大学の方針の変更に伴い、大学のアカウントでは Microsoft の Office365 サービスを利用しての一般公開が不可能になった。その代わりに制作した動画を含め、公演の様子を YouTube にて配信した。
- 6) 「オペラ実習」ではキャストやピアニストもスタッフとしていずれかの係の仕事を分担して行う。また、複数のスタッフを兼任する学生もいる。表の括弧内は兼任した学生の数を示している。
- 7) 公演に向けて感染症対策係、プロジェクター係（投影する動画の操作）、プログラム係、記録係（写真を撮り公演までの様子を記録する）、衣装係、照明係に再編した。

引用・参考文献・Web 資料

- 梅津時比子 (2020) 「アートな時間 クラシック 藤原歌劇団公演「カルメン」：ビゼー作曲 オペラ全 4 幕〈字幕付き原語（フランス語）上演〉安全性に徹底配慮して対応 「カルメン」待望の公演再開」『エコノミスト』98, 32, 毎日新聞出版, pp.88-89.
- 枝川一也・大野内愛 (2013) 「総合的な人間力を育むための広島大学における合唱・オペラ実習の実践研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要. 第二部, 文化教育開発関連領域』62, pp.339-346.
- ひろしまオペラ・音楽推進委員会 (2020) ひろしまオペラルネッサンス オペラ通信 2020 年夏号, 54. 広島県公式ホームページ「全国的又は大規模イベントの事前相談に係る実施要領」
<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/uploaded/attachment/411190.pdf> (2020 年 12 月 30 日取得)
- 藤原歌劇団・日本オペラ協会ホームページ「カルメン 2020 舞台裏レポート」
https://www.jof.or.jp/performance/blog/2004_carmen/ (2020 年 12 月 30 日取得)

謝辞

本公演の Live 配信にかかわり、広島大学情報メディア教育研究センターの隅谷孝洋准教授、秋元志美氏、技術センターの三原修氏、北川和英氏、福岡佐緒理氏に多大なご協力をいただき、下記の動画の公開に至りました。深く感謝申し上げます。

動画 URL

(セビリアの理髪師) <https://www.youtube.com/watch?v=QNcRmqGAi9U>



(フィガロの結婚) <https://www.youtube.com/watch?v=ArLqoDBn2vk&t=10s>

